

阿妻一直の「札幌焼・盤溪窯」 生い立ちの記 ⑥

独立時代（初窯） 一直焼・八軒窯（その2）

溶け不足のその釉薬は、『伊羅保釉』と呼ぶ、焼き上がり茶色の釉薬で、その色をイメージしました。原料は、木灰で（木を燃やした後に残る灰）土灰とも呼びますが、その木灰に色々な原料を調合する訳ですが、木灰の種類に依っては、単味でも溶けますので、その解釈で木灰を使用しようと思いました。

木灰は事前に用意していましたが、事前処理（塩分を取り去るために水に浸す）が未完成でし

たので、その代わりになる原料を使用する事を考えました。

木灰は『天然灰』とも呼ばれますが、主成分は石灰分を多く含んでいます。その石灰分一〇〇%に近い石灰を、木灰の代わりに使用したのがその訳です。なんと、私は、天然木灰と石灰の、性質や違いを、思い出さずに石灰を、単味で釉薬にしてしま

いました。天然木灰は石灰分が主成分ですが、その他に、鉄分とか色々な成分が含まれており、窯の中で反応し合い、溶けてガラス化し

一方の石灰は、鉄分とか長石とかの成分が含まれておらず、単味では窯の中では反応できず、ガラス化できません。

そんな失敗の理由が、初窯の準備で浮かれている時にはすっかり忘れていまして、窯出し後に思い出すとは、自尊心やプライドがズタズタに打ち砕けました。血気盛んな二十代の最大のダメージでした。

初窯の作品は、今後とも未永く続きますようにと、氏子であります琴似神社に奉納させて頂きました。

神社の式典等には、他の奉納品と一緒に目にすることが出来、初心に戻り、気持ちを引き締め

初窯でのダメージから立ち直り、二回〜三回と窯を焼き、初個展を開催する事が出来ました。次回は、人との出会いを書きます。その思い出を掲載します、お楽しみにお待ちください。



天然灰単味花瓶（左）



窯出し後の窯正面



窯出し後の炉内



第1回作陶展（初作陶展）